

吉良上野介の傷

上杉 太郎

江戸城松の廊下で吉良上野介が受傷した際、最初に手当てをしたのは將軍綱吉の侍医だった本道（内科）の津軽意三（よしぞう）と、外科の坂本養貞である。だが兩人では、患者の出血がとまらず手にあまるので、当時、外科の名医と評判だった町医の栗崎道有が往診先より呼びだされて治療に当たった。

このときの経過が『道有日記』に克明に記されている。

「上野介の額の切創は斜めに三寸五分（十一センチ余）あり、骨まで達していた。背中にも七寸（二十センチ余）の切創があったが、こちらは浅手であった。そこで額の傷を熱湯で洗い、小針小糸で六針縫い、そのあと石灰をまぜた煉葉を貼って傷口を塞いだ。背中の傷は三針縫合しただけですんだ。さらに上野介の着ていた白帷子（しろかたびら）

の袖を引き裂いて包帯とし、手際よく縫合個所に巻きつけた」
見えるなり」（堀川豊弘著『吉良義
央と元禄事件』）。

その後を原文でたどると「部屋中、
血になりたる類を吉良挟箱（着替え
用の衣服などを入れる長棒のついで
た箱）へ入れさせ、畳にも方々血流
れ、汚らわしく見ゆるほどの物を吉
良家来中に申しつけ掃除させ……
それより吉良気を鎮め」湯呑所より
湯を取り寄せ、茶碗に食を入れ、湯
漬にて焼塩少々相求め、二碗湯漬を
用いて、一と入り元気、常の如くに
上野介の出血は、見た目ほどたい
したものではなく、むしろ低血糖に
よる気力減退があるとみた道有は、
ときを移さず台所へ駆けこみ、ご飯
をほしいと頼んだ。もし、そのとき、
手負いの吉良さまにさしあげる、と
いえば穢れだといつてことわられ
る恐れがあつたので、自分が食べる
ものだといひ、すぐにそれをもつて
部屋へもどり、みずから上野介に食

べさせた。すると患者は、たちまち
氣力を回復して全身の状態は改善
された。

道有の的確な判断と迅速な処置
によつて、上野介は救われたのであ
る。道有の栗崎流外科はその後、山
脇流としてうけつがれ、ご子孫は現
在愛知県高浜市で山脇薬局を開業
されている。